

1. 調査目的等

小学校1年生から6年生の児童の学力を把握・分析し、学校における教育指導の成果と課題の検証やその改善に役立てる。

2. 学校ごとの指標

○平成31年度のNRT学力検査で、全学年の平均値53を目指す。

3. 指標にむけての取組

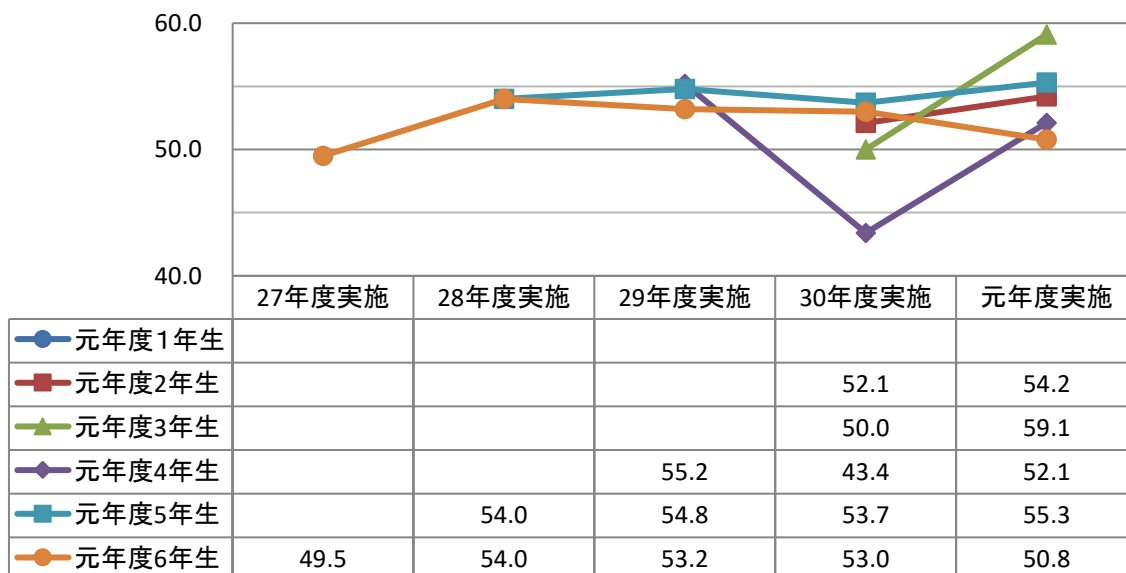
- 単元構成を工夫し、形成的評価による評価と指導を一体化させるとともに、終末段階における習熟度別分割授業を実施する。
- 朝のチャレンジタイムにおける宿題の解説・漢字・MIMを行い、基礎基本の充実を図る。

4. 調査結果

※学校平均5年間の推移 (標準偏差値50に対して)

年度	27年度	28年度	29年度	30年度	元年度
本校(A)	49.9	52.4	54.0	50.8	54.8
嘉麻市(B)	50.8	50.7	51.5	51.4	51.1
(A) - (B)	-0.9	1.7	2.5	-0.6	3.7
標準偏差値との差 (A) - (50)	-0.1	2.4	4.0	0.8	4.8

各学年の推移



5. 各学校における分析

学校全体としては、国語52.2、算数57.4、全体平均54.8であった。

算数科においては、単元プレテストの結果から、習得が不十分な部分を把握し、習熟度別プリントを作成した。全国平均通過率90%以上を目指し、誤答の多かった問題を中心として、プリントを作成・活用し、習熟度別に取り組んだことは、全国平均の通過率を上げる上で有効だった。

国語においては、どの学年も「読むこと」に課題がある。

1年生は、MIMの学習において、カードやタブレットを活用した音読やゲームなどに取り組んだ。他学年は、読み取りを中心とした宿題の解説時間を設け、全員で答え合わせと書き直しができるようにした。その際、各学級に専科を割り振り、実態の厳しい児童への支援ができるようにした。

自分で目標を決め、達成感を味わうことのできる活動として、毎学期末に、漢字・算数検定を各2回実施した。特1級・1級・2級・3級などの目標を持たせ、全児童に認定証が渡せるよう、指導方法工夫改善教員が準備し、終業式には校長が各学級に出向き、代表児童に渡した。また、プロセスを大切にすることの意味から、伸びが見られた児童に対しても、評価をするようにした。

6. 各学校における今後の取組

【単元構成を工夫し、形成的評価による評価と指導を一体化させるとともに、終末段階における習熟度別分割授業を実施〈継続・充実〉】

○複数体制による授業の実施〈継続〉

○単元構成の工夫による習熟度別分割授業の実施と全国平均点通過率の向上〈継続〉

○評価後の個別シートの活用により、個に応じた指導を充実させる。〈継続・充実〉

【朝のチャレンジタイムにおける宿題の解説・漢字・MIMを行い、基礎基本の充実〈継続・充実〉】

○1・2年生においては、MIMの計画的な実施による、初期段階での読みのつまづきの克服と読むことへの意欲の向上を図る。〈継続〉

○朝のチャレンジタイムにおける宿題の解説・漢字・MIMを行い、基礎基本の定着を図る。〈継続〉

○毎学期ごとに実施する漢字・算数検定で「読み・書き・計算」の定着や学習意欲の醸成を図る。〈継続〉

【読書活動を充実させ、月ごとにテーマを決めることで、読解力の向上を図る。〈継続・充実〉】

7. 嘉麻市教育委員会としての今後の取組

◎今後の取組を具体化し推進することができるように、特に、次の3点について指導助言及び支援を行うとともに、周知徹底できるように継続的に指導する。

◆嘉麻市学力向上推進委員会に基づく学力向上検証改善委員会を開催し、単元テスト評価後の個に応じた習熟度別指導を取り入れた指導方法の工夫を推進する。そのために、習熟度別指導の単元づくりや個に応じた補充プリントの活用の仕方について指導する。

◆嘉麻市学力向上全体構想に設定した思考を伴う「書く(かく)活動」や目的のある「話し合い活動」を核とした授業づくりを推進する。そのために、校内研修での授業観察指導を実施したり、「学力向上に向けた授業づくりの8つのポイント」や「書く活動ポイント9」を活用することができるように指導助言や支援を行ったりする。

◆学力の根源をなす非認知能力の育成を推進する。そのために、「読書活動」を中心に「鍛ほめ福岡メソッド」の仕組みを機能させるよう指導助言を行う。

嘉麻市立小中学校全国学力・学習状況調査等の結果公表に関する規定(H28.11.2)第6条2項の規定に基づき、小学1年生の結果については公表は行いません。